

モデル・プログラムを活用したカリキュラム作成例

日時	〇〇〇〇年 〇月 〇日(木)13:30~15:00					
研修名・授業科目名	〇〇市立〇〇小学校 校内研修会					
講師	菅原雅枝					
時間	1時間30分					
受講者等に関する情報	<ul style="list-style-type: none"> ・人数：20人 ・タイプ：基礎・研修 ・その他の情報：在籍学級担任を対象(国際教室設置校) 					
講演題目・テーマ等	外国につながる子どもたちへの指導ークラスづくり・授業づくり-					
到達目標	外国人児童の学習時の困難について講義と体験を通して理解し、支援方法について得られたヒントを元に自分のクラスで課題意識をもって対応しようとする。					
活動展開 (下線は項目)	方法 形態	時間 (分)	留意点	モデル・プロ グラム	参考資料	
導入：〇〇小学校にいる外国人児童生徒を捉え直す。 ・ <u>在留外国人数</u> ・日本語指導が必要な児童生徒数を知り、国、市、〇〇小学校の現状を捉える。	講義	10		③現状と受け入れ施策	法務省統計 文科省調査	
展開1： <u>受け入れ体制の振り返り</u> 外国人児童生徒等の受入手順を考える。 ・自身の受け入れ時の対応を振り返る。 ・『受け入れの手引き』等を基に、 <u>受け入れ時の準備等</u> について知る。	講義	10		⑤学校での受け入れ体制	文科省『外国人児童生徒受入れの手引き』	
展開2： <u>在籍学級で求められる言語能力とその支援</u> について考える 英語による教科学習を体験し、子どもたちの気持ちを想像する。 ・外国の学校での算数の暗算テストの映像(6分間)を見ながら、一緒に答えを書く体験をする。 ・講師と受講者がやりとりしながら、 <u>生活言語能力と学習言語能力の違い</u> や第二言語で学習するときの子どもへのストレスについて考える。 ・教師として必要な配慮(視覚情報、話し方)や学習環境について意識する。	活動 (疑似 体験)	30	授業言語の選択に際しては参加者の背景に留意しながら決定すること	⑯言語能力の捉え方 ⑳在籍学級での支援	自分で撮影した動画を使用。ALTに依頼して同様の動画を作成することも可	
展開3： <u>文化間移動によって生じる課題を知る</u> <u>文化間移動する子どもの文化適応の特徴</u> について具体例を通じて理解する。 ・家庭と地域の文化との違いによるストレス ・ <u>母語・母文化の喪失等</u> により家庭内で生じるストレス ・適応の3側面(情動・認知・行動)と年齢との関係について理解する。	講義	10		⑫外国人児童生徒等の心理 ⑪母語・母文化・アイデンティティ		
展開4： <u>在籍学級での支援</u> を考える ・理解を促す、表現を促す、記憶を促す、自立を促す、 <u>情意を支援する</u> の5つの視点からの支援ができることを知る ・わかりやすい日本語での情報提示について知る	講義	15		㉑在籍学級での支援		
展開5： <u>学校全体での支援体制</u> を考える <u>校内の体制作り</u> について問題意識を持つ ・〇〇小学校の <u>受け入れ指導体制</u> や教員間の連携がどうなっているかを振り返る ・保護者、母語支援者、日本語ボランティアとの連携や情報共有のあり方について意識する	講義	15		⑤学校での受け入れ体制		

時間	90 分
内容	⑫外国人児童生徒の心理
項目	文化間移動, 異文化適応のプロセス, 発達段階と文化適応の特徴, 同化/排除/統合/境界化, 教育的介入, ハネムーン・ピリオド
方法・形態	<p>a 講義型</p> <p>b 活動型 (事例報告/事例研究/指導案作成/活動設計/教材分析/教材作成/模擬授業/疑似体験)</p> <p>c フィールド型</p>
流れ	<p>1 文化間移動と異文化適応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自身が文化間移動をした時の体験と比較しながら, 「同化/排除/統合/境界化」「ハネムーン・ピリオド」「カルチャー・ショック」などの概念について理解する。 ・異文化適応がUカーブ, Wカーブなどのプロセスを経ることを知る。 <p>2 学校文化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・映像資料などで外国の学校の様子を知る ・異なる文化の「隠れたカリキュラム」や「よい子」像のちがいを紹介する。 <p>3 子どもの異文化適応の特徴を知る (30分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発達段階と文化適応 ・教育的介入 ・サードカルチャーキッズ <p>3 子どもの異文化適応の特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大人より子どもの方が異文化適応が容易または困難になる要因を考える。自由意志の有無, ネットワーク, 家族との関係, … ・発達段階と文化適応の3側面 (情動, 認知, 行動) の関係を知る。 ・教員としてどのような教育的介入が可能か話し合う。
備考	時間が短いときは3を中心に30分程度または話し合いに時間を充て45分程度で行う。

時間	90分
内容	⑫外国人児童生徒等の心理と適応
項目	文化間移動、子どもの文化や宗教への配慮、発達段階と適応の特徴、自文化中心主義、教育的介入
方法・形態	a 講義型 b 活動型（事例報告／事例研究／指導案作成/活動設計/教材分析/教材作成／模擬授業／疑似体験） c フィールド型
流れ（項目）	1. 文化間移動をする子どもが直面する文化的差異を想像する。 1 課題の把握（30） ・文化間移動 ・子どもの文化や宗教への配慮 ①来日直後の外国人児童が違いに戸惑うだろうことを、付箋に書き出す。 アンさんはフィリピンから来た小学4年生です。学校文化の違いで、どんなことに戸惑うと思いますか。 ②それぞれが想像した事柄を、付箋を示しながら紹介する。 ③付箋をグループ化し、「想像される戸惑い」としてラベルを付ける。 2 事例研究（45） ・自文化中心主義 ・発達段階と適応の特徴 2. 外国人児童生徒等の事例（エピソード）から、文化適応について知る。 ①グループ内でそれぞれが異なるエピソードを読み。他の2人に紹介する。 エピソード例 A 忘れ物（学校に持ってくるもの）が多い B たべたことがない料理が多く、給食がたべられない C ピアスをつけてくる ②各エピソードについて話し合う ・どうして問題が起きるのか。（子どもの行動の背景にある文化を理解する） ・解決のためには、何をすればよいのか。（自己の文化を捉え直す） ・子どもの年齢が異なる場合、エピソードの事態はどう変化するか。 3 解決方法の検討（15） ・教育的介入 3 1の「想像される戸惑い」を軽減するために、教師・支援者として、どのような支援・教育をするか話し合う。 子どもに直接働きかけることは？周囲の子どもたちに働きかけることは？。
備考	1の児童、2のエピソードは、地域や学校でよく話題になることなどを例として示す。内容⑫について講義を行った後であれば、2を中心に45分程度で実施。

時間	45分
内容	⑫外国人児童生徒等の心理と適応
項目	文化間移動、適応のUカーブ・Wカーブ、発達段階と適応の特徴、教育的介入
方法・形態	a 講義型 b 活動型(事例報告/事例研究/指導案作成/活動設計/教材分析/教材作成/模擬授業/疑似体験/経験の振り返り) C フィールド型
流れ(項目)	1. 文化間移動の例を知る。 ①文化間移動をする子どもたちの多様なケースを知る。 出身国・地域⇒日本 出身国⇒日本⇒出身国 第三国⇒第三国⇒日本 出身国⇒日本国内 A 県⇒日本国内 B 県 日本⇒親の出身国 ②自身の文化間移動体験を挙げる。 引っ越し、転校、中学・高校への進学、大学進学・就職 部活・サークル活動の変更、海外生活体験 2 自分の文化間移動について、次の項目について振り返る。 ①それぞれに、ワークシートに以下の点を書く ・文化間移動後に違いに戸惑ったり、苛立ったりしたことはなにか。 ・その後、差異に対する態度や行動にどのような変化があったか ・どのぐらいの期間で、差異と感じなくなったか。 ②適応のU・W字曲線について知り、①の適応プロセスを分析する。 3 文化適応を支援する方法を考える。 ①自身の文化適応過程をコントロールするための方法について話し合う ②教師・支援者として、文化適応を支援する方法について考える
1 課題の把握 (10) ・文化間移動	
2 経験の振り返り (20) ・発達段階による 適応の特徴 ・U字・W曲線	
3 解決方法の検討 (15) ・教育的介入	
備考	講義などで、1の文化間移動や2②で扱う適応過程について学んだ後であれば、2①を中心に20分程度で実施。

モデルプログラム例 112b-3

時間	90 分
内容	⑫外国人児童生徒の心理
項目	異文化体験学習, 自文化中心主義, 文化相対主義, 同化/排除/統合/境界化 文化間移動, 教育的介入
方法・形態	a 講義型 b 活動型 (事例報告/事例研究/指導案作成/活動設計/教材分析/教材作成/模擬授業/疑似体験) c フィールド型
流れ	
1 異文化体験ゲームを行う (30分)	1 異文化体験ゲーム「バーンガ」を行う。 ・グループに分かれる。ゲームが終わるまで話さないことを指示する。 ・「バーンガ」を行う (参考文献: 神奈川県教育委員会『人権教育学習教材 (平成 22 年版)』)
2 体験の振り返り (40分) ・異文化体験学習 ・自文化中心主義 ・文化相対主義 ・同化/排除/統合/境界化	2 異文化体験ゲームの振り返り ・ゲームの間に感じたことを話し合う。 ・DIA 法を使って, 実際におこったこと (description), それを見てどう解釈したか (interpretation), どのような気持ちになったか (affection) を分けて考える。 ・自文化中心主義, 同化/排除/統合/境界化などの概念を紹介し, 体験を整理する。 ・ゲームと同じことが日常生活のどのようなときに起こりうるか, またその場面に遭遇したらどうしたらよいかを話し合う。
3 教員・支援者の役割を考える。(20分) ・文化間移動 ・教育的介入	3 教員・支援者の役割 ・ゲームの体験を踏まえて, 教員・支援者として文化間移動をする子ども達にどのような教育的介入ができるか話し合う。
備考	

時間	120 分
内容	⑫外国人児童生徒等の心理と適応
項目	文化間移動、子どもの文化や宗教への配慮、発達段階と適応の特徴、教育的介入、文化変容（同化、排除、統合、境界化）、サード・カルチャーキッズ
方法・形態	a 講義型 b 活動型（事例報告／事例研究／指導案作成／活動設計／教材分析／教材作成／模擬授業／疑似体験） c フィールド型
流れ（項目） 1 オリエンテーション（30） ・文化間移動 ・子どもの文化や宗教への配慮 ・発達段階と適応の特徴 2 支援活動（60） ・教育的介入 3 体験の振り返り（30） ・心的文化変容（同化、統合、排除、境界化） ・サード・カルチャー・キッズ	1. 訪問先のフィールド（学校、ボランティア教室）と児童生徒、訪問時の活動とそのねらいについて知り、配慮すべきことを検討する。 身体接触、宗教的背景、自尊感情、ジェスチャー等 2. フィールド（学校、ボランティア教室）で支援活動を行う。 ①フィールドの担当者より、その時間のねらい、活動内容を聞き、それに従って、子どもの支援を行う。（できれば、事前に、聞いて、オリエンテーションで伝えておく） ②子どもの支援活動を行いながら、次の点を観察する ・子どもの学習上の困難 ・コミュニケーション上の困難 ・周囲の子どもや教師・支援者との係わり方 3 フィールドで参観したことを振り返る。 ①支援したことや子どもの様子を2②の観点から話し合う。 可能であれば、フィールドの担当者から話を聞く。 ②心的文化変容モデル、サードカルチャーキッズ概念に照らし、子どもの今の適応状況について分析する。
備考	講義等で、1、3②で扱う項目を既に学んでいる場合は、それぞれの時間を短く設定して実施。フィールド・対象児童生徒の情報と支援の内容については、事前に受講者と話し合っておく。